



## 【新庄の神話～彌美神社の発祥・例祭～】

福井県美浜町の宮代(みやしろ)という地区に彌美神社(みみじんじゅ)という神社があります。このご祭神は、新庄区の大日(だいにち)というところにある仏洞(ほとけぼら)に降臨したという言い伝えがあります。

伝説によると昔、新庄の大日という地籍の一角に仏洞と呼ばれるところがあり、このヨボの木(リョウブ)に金の御幣がかかっている、この御幣をお祀りしたのが彌美神社ということです。新庄が彌美神社の発祥の地と伝えられています。

彌美神社の祭神は室毘古王(むろびこのみこ)(開化天皇の第3皇子である日子坐王(ひこいすのみこ・彦坐王とも)の子)で、若狭之耳別(わかさのみみわけ)という一族の祖とされます。この耳別という一族が統治していた地域を、その名にちなんで耳の庄と呼び、耳川という川の名にも、また、耳村という村の名にもなっていました。現在では、耳川の名は残り、耳村は地区の名前(耳地区)として残っています。

室毘古王一行は大和の国より若狭の国に入り、大日沢の仏洞の近くに耳平野を一望できる峠があることから、この仏洞に滞在し、統治の計画などをたてたといわれています。そこで室毘古王のお姿を、この仏洞のヨボの木にかかる金の御幣に重ねたのではないのでしょうか。

毎年5月1日の彌美神社の例大祭には、新庄の集落で、ヨボの木を幣串とした一本幣といわれる御幣と、コブシの木を幣串とした御幣を7本束ねた七本幣(新庄の7村を表わしているともいわれます)を作り、朝に彌美神社へ持参します。また、新庄区以外の地域当番によりヨボの木で作られた大御幣が祭礼の朝社前に持参され、各集落の御幣とともに幣招きという儀礼を終えた後、一旦参道入口まで降りて高台に据えられます。新庄区で作られた一本幣が金の御幣を表す祭神(室毘古王)で、七本幣は室毘古王率いる耳別の一族を表わしているといわれています。また大御幣は耳別が統治していた原住民を表わし、幣招きの儀礼は原住民が神に対して挨拶をし、指示を仰ぐ儀とされています。

祭礼では新庄の一本幣、七本幣を先頭に各集落の御幣が続き、その後王の舞、獅子舞という順で行列し、社前から参道入口の大御幣のところまで降り、そこで神が大御幣に乗り移るとされる、幣迎えという新庄の両御幣と大御幣との対礼の儀が行われることから始まります。その後王の舞、獅子舞が大御幣と対礼を終え、行列は社前に向かいます。大御幣はその後威勢よく押し立てられて進んでいきますが、この際に万が一でも一本幣を追い越すことがあれば、一本幣を逆手にかざし大御幣をはたき落しても差し支えないとの言い伝えがあります。ここで大御幣を押し立てることは、原住民が神の指示に従い開拓事業等に従事する様子を表わしたものと解釈されています。

この行進が社前に達すると一本幣と七本幣は本殿に納められ、王の舞と獅子舞は各々の控え場所へ控えます。その後大御幣を押し立てて本殿に押し上げようとする「上げ番」とそれを阻止しようとする「下げ番」とにより、参道を往来する幣押し(御幣の儀)が「上げ、下げ」の掛け声とともに行われますが、適宜の時間になると大御幣とともに大御幣差(おおごへいさし)という役割の男の子を担ぎあげ、社前の石段を「上げ、上げ」の掛け声とともに押し上げられて大御幣は本殿に納まります。大御幣とともに男の子を押し上げることは、神の偉業が完成し、祝福するとともに神に感謝の念を捧げ、神に仕えることを誓う意味ととらえられます。

その後、宮司により一本幣と七本幣が持ち出され、拝所において拝戴の儀(神の御神徳を戴く儀式)が行われ、その後王の舞(福井県の無形民俗文化財に指定されています)、獅子舞が奉納され、祭礼は終了します。

(「彌美神社」のホームページもぜひご覧ください。<http://www1.k1.mmnet-ai.ne.jp/~mimi-jinjya/>)